http://alce.jp/journal/ 第22巻（2024）pp. 306 - 321 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

フォーラム

「何かが生まれる」ときを記録する

産学民のまちのひとの羅生門的手法による語り

佐野 香織*
（長崎国際大学）

概要

本稿では，まちに住み，よりよいまちを考え動いている産学民の多様な人々が，「何かが起こり生まれた」と感じ口々に語っていた一つの出来事を取りあげる。本稿で記述するのは，日本の地方都市で，Co-ya（仮名：団体名および場所名）が生まれる黎明時の実践の記録である。本稿の目的は，実践を共有するストーリーとして描き，次の実践研究を考えるリソースとなるようなストーリーの記録とすることである。よりよいまちをめざして，かかわり，動いている多様な人々の間で，どのようにCo-yaが生まれたのか，ストーリーとして描きだすことをめざした。そのために，羅生門的手法を用いて，6名の語りそれぞれから「どのようにCo-yaが生まれたのか」を多面的に記録した。

キーワード：実践研究，実践の共有，ストーリー，羅生門的手法，記録

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

1.「なんだかよく分からないけど，なにかが起こっている」

「住民主体のまちづくり」が必要である，という声をよく聞く。こうしたまちにおける市民活動の実践の多くは，活動を立ち上げる背景，動機，問題発見から始まり，その解決のために活動計画をたて，人を集め，考え，主体的に実行する，という流れが描かれていることが多い（広石，2020；山崎，2012）。「活動を生む」，「活動を生みだす」方向性であり，活動当初から計画も存在する。

しかし，一方で「活動が生まれる」という方向性もある。なにかが「生まれる」と感じる瞬間は非常に不思議である。それは，意図的に計画して創られるものとは異なる，「生まれてしまった」，「なんだかよく分からないけれどもできてしまった」という自然発生感に近い。こうした時（moment）を経て動き出すことは，意図的ではないだけにその時は何が起こっているのか分からないことが多い。ただ，「なにかが起こっている」「なにかが起こっていた」という

* Eメール：sano.kaori@niu.ac.jp

本研究はJSPS科研費基盤 (C) JP23K00644の助成を受けたものです。

感覚が残る。

本稿は，本稿を執筆する私を含め，まちに住み，よりよいまちを考え動いている産学民の多様な人々が，「何かが起こり生まれた」と感じ口々に語っていたことを取りあげる。それは，後にまちの活動，コミュニティになっていた。本稿で記述するのは，日本の地方都市でCo-ya（仮名）が生まれる黎明時の実践の記録である。

2. 本稿の目的

本稿は，後述するCo-yaにかかわる人々の実践研究の記録として位置付ける。本稿は，どのようにすればうまくいくのか，といった活動実践のためのマニュアル，道筋をつけるためのものではない。そういった意味では，三代ほか（2014, p. 94）の「次の実践研究のための一般理論を提供するのではなく，次の実践研究を考えるためのリソースとしてのストーリーを提供する」ということに近い。近年，多様な人が集まり，産学，産官学，産官学民等の連携で「よりよいまち」「よりよいコミュニティ」を考える実践が増えている。しかし，それらの多くはあらかじめ計画され，計画が終了した後の報告であることが多い。本稿では，三代ほか（2014）がいう，実践を共有するストーリーとして描き，そして語り継ぎ，次の実践研究を考えるリソースとして還元できるようなストーリーの記録とすることをめざしたい。私を含め，よりよいまちをめざして，かかわり，動いている人々の間で，どのようにCo-yaが生まれたのか，ストーリーとして描きだすことを目ざす。

3. Co-yaの実践を取りあげる理由

私はそのまちにかかわる市民が交わる中で，創造的に動的にことばを使いながら，自分たちのことばもまちもつくっていく，ということを考えている。「ことば」を「日々の営みの中で，人と人，人と場，人と環境等，人が関わって用いられるもの」（佐野，2021, p. 72）として考えるものである。これは，そのまちにかかわる人，外国人定住者，他地域からの移住者，学生等も含め，市民がかかわりあいながら，狭義の「言語」ではなく「まちのことば」としての「ことば」を共に考えつくっていくことが重要であるという姿勢である。

この姿勢で考えるならば，外国人労働者の本格的受け入れやまちの外国人住民増加から日本の地方自治体が日本語教育の推進として行う「地域日本語教室」[1]も，外国人住民と日本人住民が語学としての狭義の「日本語」を学び，「日本語」を通してコミュニケーションを学び合う場所，と定位されない。多様なまちの人が，「よりよいまち」をつくる中で，多くの人と連携しかかわりながらことばをつくっていく機会と場所ともなり得る，といえる。私たちは小さな色々なものと「ちょっと」ずつ，つながりながら生きている。食べることも学ぶことも人生を考えることも，「生きる」ことの線状にあるが，そこに狭義の「ことば」だけを切り取ってみていくことはできない。

細川（2013）は，「ことばの市民」という概念を提案している。ここでいう「市民」とは，ある国家等の社会構成員としてあるだけでなく，批判的な目を持ちながら政治・制度への発言の自由を保持する自律した個人のことである。この「ことばによって自律的に考え，他者との対話を通して，社会を形成していく」個人を，「ことばの市民」と呼んでいる（細川, 2013, p. 14）。さらに，「それらの個人が共に活動し，共に生きる「公共空間」を求めるならば，まず，

1　文化庁は「生活者としての外国人」のための日本語教室空白地域解消推進事業として「生活者としての外国人」の日本語学習環境の整備をすすめてきた。現在は文部科学省が行っている。

ことばの活動によってそれぞれのコミュニティを支え，構成することが必要」(p. 13) と述べている。この「公共空間」を本実践でとりあげる場と考えるならば，私は多様な人が集まり，活動が生まれた本実践が,「ことばの市民」を培い，まちで「ことば」をつくっていく契機になるのではないか，と考えた。本実践を取りあげることで，ともにまちをよりよくするという想いで集まり始めた団体は，どのような人がかかわり，どのような想いをもって生まれたのか，その黎明期から見ていきたいと考えた。

4. Co-yaの概要

本章では，4. 1. にCo-yaが生まれたまちの背景，4. 2. にCo-yaの詳細，4. 3. にCo-yaの活動が生まれるまでのイベントを記述する。

4. 1. Co-yaが生まれたまちの背景

Co-yaが生まれたまちは，日本の西端の地方都市にある。移住者募集用のキャッチフレーズには,「異文化と豊かな自然。音楽も食も人もA市ならではのものが存在する」「異国情緒漂う港町」「天然のコンパクトシティ」と謳われている。一方，そのまちに住む人からA市をあらわす表現としてよく聞くのは,「中途半端」である。都会でもなく，自然豊かであるが，かといって鄙びた田舎でもない。いろいろなモノ，コトがあるようでしかし，ない。市立美術館などアートに触れる機会がない。電車や車で1～2時間行けば，日本有数の大都市に出ることができるので，そちらに人が流れてしまう。実際，A市の人口減少はかなり急速に進んでいる。若者の市外流出もあり，人材がA市に定着しないという悩みもある。

そのような中でも,「ないものを嘆くのではなく，ないなら自分たちでつくればいい」と活動している人々もいる。本実践もこのような機運の中から生まれたものである。コロナ禍を通して，これまで，個々にかかわる業界，分野，コミュニティの中で行ってきた活動が，少しずつ横のつながりにも気づき，かかわっていこうとした時期でもあった。

4. 2. Co-yaの詳細

Co-yaは2022年8月半ばから「やさしい家（仮）」プロジェクトとして動き出した。Co-yaはゆるやかな団体であるため，正確な団体人数は把握できていない。話し合いの資料（非公開）には,「不登校のこどもの支援，こども食堂，地域包括支援センター，福祉事業者，高齢者健康フレイル支援，フードバンク，留学生，生活者としての外国人支援，医療従事者，信用組合，大学教育者，教育関係者，大学生，など，多様な専門・背景をそれぞれに持つ人々が，それぞれの想いを持って「この指とまれ！」の掛け声のもとに集まりました。領域横断のかけあわせ力で，個々に抱える課題に寄り添い合い，みんなでつくり，変えていく団体＆場所です」とある。

Co-yaは，人の集まりとしての団体名でもあり，場所名でもある。場所としてのCo-yaは，A市の主要駅から程近い，住宅地内の古い一戸建てである。Co-yaは，市内でも有数の斜面地住宅地に建っている。近年，斜面地での生活が困難になった高齢者が居住地を移していくことから，この住宅地には空き家が増加している。Co-yaは，空き家対策，地域活性化にもかかわるものでもある。

表1. Co-yaの活動が生まれるまでのイベント

年月	イベント
2022年9月初旬	Co-yaお掃除会＆Co-ya夢を語る会
2022年9月中旬	Co-yaの名前決定，ロゴ制作
2022年9月末	Co-ya夢を語る会
2022年11月	Co-yaペンキ塗り会

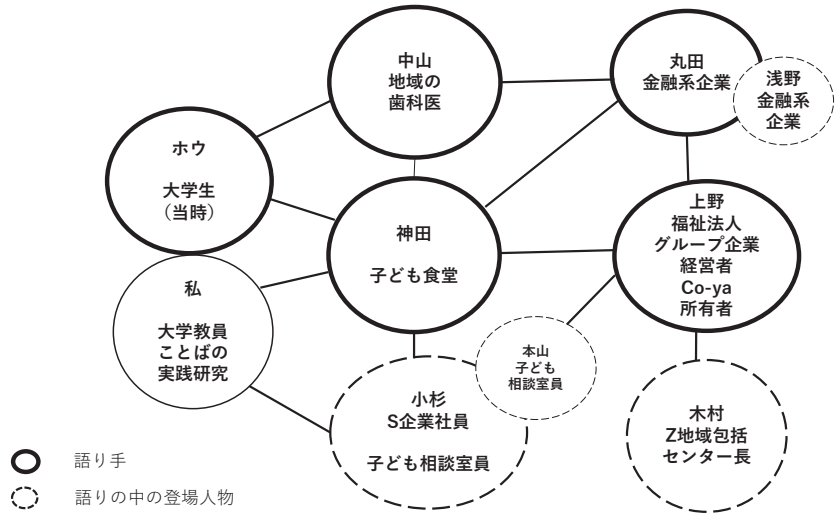

図1. ストーリー人物の関係図

4. 3. Co-yaの活動が生まれるまでのイベント

Co-yaにかかわる人が参加したイベントを表1にに時系列で示す。このイベントとイベントの間では，無数のメッセージチャットによるやりとりが行われていた。

5. 本稿で取りあげるストーリー

本章では，5. 1. で取りあげる人物，5. 2. で記述方法について述べる。

5. 1. 人物

本稿では，Co-yaの始まりからかかわり，それ以降もCo-yaの活動を継続していると考えられる5名にインタビューを行い，その語りを記述した。私については，Co-yaにかかわる一人としてその黎明期をふりかえったことを記述した。以下の人物名はすべて仮名である。

上野　上野は，A市およびB県内で福祉法人の連携グループで複数企業を経営する経営者である。Co-yaの一戸建ては上野の企業の所有物であり，無償で提供されている。

中山　中山は，A市の地域の高齢者の方の治療・予防検診を行う「地域の歯医者さん」である。「こう見えて歯科医師です」がキャッチフレーズ。

神田　神田はA市でこども食堂を運営している。「貧困のこどもが来る食堂」という狭い意味とイメージのこども食堂ではなく，「ママやこどもたちの“居場所づくり”」として，親子が憩える広場のイメージへと拡げている。

ホウ　ホウは，A市にある大学に通う留学生である。3年次編入学したが，コロナ渦でなかなか日本入国できずにいた。4年生になって，ようやくA市にある大学のキャンパスに通学できるようになった。現在は卒業し，A市外で働いている。

丸山　丸山は，A市の金融系企業の職員である。いつもほとんどのイベントや活動にいる。

表2. インタビュー詳細

名前	インタビュー日時	時間	方法
上野	2023年5月11日	90分	対面
中山	2023年5月23日	46分	対面
神田	2023年5月23日	30分	対面
ホウ	2023年5月17日	45分	オンライン
丸田	2023年5月23日	40分	対面

私　本稿を記述しているA市在住A市にある大学の教員。2020年コロナ渦の始まりとともにA市に来た。

図1に人物の関係図を示す。点線で囲んだ人物は語りはないが，ストーリーの中に出てくる人物名である。

インタビューは，それぞれ表2のように行った。なお，インタビューの内容を掲載することは各自に承諾を得ている。

5. 2. 方法

2. で述べた通り，本稿は，「次の実践研究のための一般理論を提供するのではなく，次の実践研究を考えるためのリソースとしてのストーリーを提供する」(三代ほか, 2014, p. 94) ことをめざしている。本稿ではこのストーリーを，羅生門的手法で描く。

羅生門的手法とは，映画の名前に由来した方法である。芥川龍之介の『藪の中』を原作として制作された「羅生門」という映画では，一人の男の死を巡って証言をする3人の三者三様の「事実はこうだった」を描く（佐藤，2002)。この手法から，一つの出来事を複数の人の視点から語らせる手法のことを羅生門的手法と呼んでいる（吉田，1969)。

羅生門的手法では，①出来事を個人の語る経験によって描く，②出来事を複数の視点から眺め，複数の経験を並列させて提示する，③複数の「経験の物語」の重ね合わせによって出来事の多面性がみえる，という（荘島，2008)。本稿においては，Co-yaにかかわる6名の「Co-yaはどのように生まれたのか」について語る個人の経験を，6名の視点から眺め，並列させて提示することで，6名の「経験の物語」の重ね合わせによる出来事の多面性を記録していく。

6. 「Co-yaはどのように生まれたのか」についての語り

本章では，「Co-yaはどのように生まれたのか」についての語りを，上野，中山，神田，ホウ，丸田，私，の順に記述していく。

6. 1. 上野の語り「ただただ取り壊されるのを待つだけの空き家」から「宝箱」へ

上野は，福祉法人グループの企業を複数経営している。Co-yaも上野の企業の所有である。上野は，「福祉」のラベルを外した「福祉だけで福祉をしない」社会の仕組みづくり，デザイン，ものづくり，ひとづくりをめざし，これまで誰も思いつかなかった「福祉×○○」の可能性を拡げて考えている。だからこそ，Co-yaのかけあわせにも敏感だった。

最初のきっかけは，上野が「ただただ取り壊されるのを待つだけの空き家」を持っている，と言う話からだった。上野は共に仕事をしていたS企業とのつながりで，社長から当時S企業の社員であった小杉を紹介された。小杉はその古い空き家の話から「取り壊されてしまうのはもったいない。何か地域の取り組み拠点にしたい」ということで，こども食堂の神田，金融系企業の丸田とも話をしていた。上野は次々に出てくるかけあわせの素から，何かおもしろいものが生まれるかもしれない，という予兆を感じ，持っていた空き家をその可能性にかけるという姿勢をとった。

> 「何か地域への取り組みやってるっていうことで，拠点は？っていう話になったときに，A市ってなんかそういう開かれた，かつ自由度が高い拠点って少ないんですよね。だから，もう，どうせ取り壊されるまでの間，あと何年使えるか分かんない建物だけど，何か次の

仕切り直しが来るまでは，自由に使っていいですよって，僕も言っただけだったんですよ」

こうした話が出てきたのは，2022年8月中旬から8月末だった。しかし，ここから小杉の声かけ，神田や丸田とのつながり，SNSでの発信等で，人が人を呼んだ。総勢50名近くの人がCo-yaに集まり，「お掃除会」が行われた。

「小杉さんが粛々と1人で何かサークル活動やったりとか，S企業さんの事務所は遠いのでリモートワークする場所にするのかな，ぐらいだったんですよ。そしたらなんか，初回のお掃除イベントで，あれ，何十人集まりましたっけ？だから本当，なんだろう，巻きこまれ福祉ができた！みたいな感じですよね」

Co-yaは2階建て築40年程度の老朽化が激しい家である。しかし「お掃除会」後，2階で今後のCo-yaを考える「夢を語る会」で話をした時には，2階の床が抜けてしまうのではないかと心配するくらいたくさんの人がいた。上野は，参加者それぞれがこれからのCo-yaの未来を考え話していたことから，Co-yaを「宝箱」と呼んだ。

「蓋開けたら，全部これやらないと，絶対必要だよねってことしかなかったわけじゃないですか。そしたら全部まとめて，十八番って得意っていう意味もあるけれど，なんかね，四次元ポケットみたいに，いろんな宝箱みたいに，みんなのやりたいことが詰まってるって，めっちゃ素敵だなと思って」

上野には元々，自分の事業所でCo-yaの場所に作ることを考えていたアイディアがあった。しかしそこにある理念と，Co-yaの方向性が似ていることも感じている。

「福祉施設をあそこに作りたいと。ただ，僕がですね，福祉施設だけで福祉をやる福祉が嫌いなんですよ」

「なんで，福祉施設なのに，なんかいろんな人が勝手に使っちゃってるっていうのが，理想的ではあるんですよ」

「やりたいって言ってることがいることがまず「宝」なので，本当に社内でもそうですけど，何かやりたいって言ってくれるんだったらもう嬉しいから，うん，もうやろう，って言って。人間やらないと何も分かんないので，やって問題が起きたら考えようと」

その上で上野はこどもや若い人材の育成につなげ，「人」が集まり「人」が育つCo-yaのあり方を考えている。

「実は一番やりたかった児童教育には元々携わりたい方だったんです。僕，学問を教えるのはあまり得意ではないんですけど，なんか，楽しんでる大人の人をたくさん見せるっていうのが好きだなと思った」

「ほぼそういう意味じゃ，いろんな，ちいちゃい頃からいろんな人生観を持った人と触れ合えるっていいじゃない。そういう人たちにたくさんちっちゃいうちからこどもたちが触れ合うと，生き方の幅をどんどん広げてくれるんじゃないだろうかとか，思いつきを何でもすぐ仕事に変えていい世界を作ろうと思ってたので」

「やっぱりそこ人だなって思ったときに，何かCo-yaっていう拠点はそういう人たちが動きやすいね，フィールドを作ってくれたなと思います」

6. 2. 中山の語り「高齢者のフレイル予防，こどもの成長，留学生とのかけあわせ」

中山は古くからこの地域で歯科医院を営む歯科医一家に生まれ，現医院長である。地域の歯科医師として，こどもから大人までの歯の健康と予防に日々奔走している。中山がCo-yaにつながったきっかけは，地域包括センターの木村と，こども食堂をしている神田だったという。中山の大きな意識としては，まず，「高齢者の生活と社会のドミノ倒し」を防ぎ，よりよい生活や社会をつくっていくか，ということであった。

「まず僕が診療中に，患者さんが元気でいてほしい。何でも食べれるように楽しんでほしい。介護になってほしくないって思って，僕はいつも診療してたんですけど，やっぱり診療室でしか，僕，見れないっていうことで，やっぱぶち当たるんですよね」

「診療室の外を見てて，これってやっぱりみんなが介護になりたくてなってるわけじゃないから，ここを予防しなきゃいけないよねってなったときに，やっぱりその口の衰えから認知症になったり，介護に繋がったりしてるっていうことがもう，言われてたんですよね。しかもトレンドだったんです。これを広めるためにどうするのかってなったときに，包括支援センターの方に，僕は木村センター長と，近づくことがあったんで」

中山は地域包括支援センター長（当時）であった木村とつながる中で，もっと高齢者が地域で役割を持ち，社会とかかわって生きていく必要性を考えるようになった。そこに，木村とつながっていた神田が行っているこども食堂のペンキ塗りの話が中山のところにくる。

「包括支援センターの人たちともっと高齢者のその地域の活躍の場っていうものを作って，その高齢の方がその地域で役割っていうものを持ってそれが生きがいになればいいんじゃないかって話をしたんですよね。うちの病院のペンキを塗ってくれた，無料でペンキを塗ってくれたおじいちゃんがいて，ちょうど神田さんのこども食堂のところが引っ越しになって，ペンキ塗りはいないかっていう話を木村さんからもらって，地域の高齢者の役割として，この人を誘ってみようと」

「おじいちゃんに僕と一緒に，ボランティア団体で困ってるところがあるんで，ボランティアでちょっと一緒に行ってくれませんかって言って，一緒に（こども食堂の）ペンキを塗った。ペンキ塗った綺麗なところで美味しそうに食べてるこどもたちを見たら，そのね，おじいちゃんは，いや，やってよかったなって」

この経験から，中山は地域でのつながりの大切さを実感する。さらに新しいアイディアを思いつく。

「そういうことをやるとやっぱりその地域での役割っていうのが大事だなって。思ってたことがあって，別の日にですね，患者さんが，採れた野菜っていうか果物を持ってきてくれたんですよ。いつもありがとうございます，僕はもちろん，これ，いただいて嬉しいんですけど，もしこども食堂っていうところに渡していいかと伝えて，僕としては，もう僕らもらうのはもちろん嬉しいんだけど，こども食堂の方に直接持ってってみませんかっていうんです」

「そしたらこども食堂と介護予防サロンの抱き合わせっていうことをちょっと僕は考えたんですよ」

こうしたことから，中山はこども食堂と高齢者とのつながりを考えるようになった。

「なんか，今のこどもたちの視野を自然となんか広げてあげたいというか，自然とその視野が広がるような環境を作ってあげたいって。若者たちがもっとね，自分たちはこんなことして仕事して楽しんでるんだよっていう生き生きした姿もこどもたちに見せてほしいんです。だから若者たちがもっと楽しく，A市デコレーションできるように基礎作りをしたいなっていう」

これらのきっかけが，2022年8月の終わりにたちあがった，Co-yaの構想とお掃除会であった。ここで，中山は木村と神田以外は初対面であったが，それぞれの想いで意気投合した。

「多分集まるメンツが良かったんじゃないかなって思いますね。だから加速度があったんじゃないかなって」

「集まったときには何かできそうって思いました。あの瞬間」

中山は，地域の人々のかかわりを描いた以下のような理想図を持っている。中山の描くCo-yaの理想図であるともいえるだろう。

「高齢者とこどもがあってここが相互関係によって大学生と外国人が来ているんで，結局この高齢者っていう存在がいて，こども，大学生，外国人にご飯をふるまう，こどもはしつける，しつけてもらうとか，コミュニケーションをとることで高齢者の介護予防っていうものに協力してるんで，いいんですけど，もうこの大学生と外国人っていうのは，地域の高齢者に対してボランティアで返すっていう仕組みを作りたかったんですよね。この外国人と高齢者っていうのは，異文化交流ができて楽しめるっていうのがあるんで。大学生と外国人の異文化交流ができるから，語学留学も，みたいなこともできるじゃないすか。その姿にこどもたちが憧れるんじゃないかなっていう」

6．3．神田の語り「こどもを中心に「これ，やりたい！」に人が集まる」

神田はこども食堂を運営している。母親とこども，親子の居場所としてこども食堂を運営する中で，さまざまな人とかかわってきた。

「上野さん，最初のうちはちょっと会うぐらいの感じで，丸田さんがつながっていて，それがそのうち浅野さん，で，私のところにきて，本山さんは小杉さんっていう人連れてきた流れだった。丸田さん，小杉ちゃんとつながってましたし。そこよりも，本山さんたちがする，だからたぶん自分たちだけじゃちょっと大変じゃない，っつって。たくさんいたほうがたぶんいいことになるから自分たち（＝神田の関係者）も呼ぶねって。で，Z（地名）包括（マネージャー）呼んで，Z包括から中山先生も呼ぼうってなって」

この語りの中だけでも7名の名前が出てくる。Co-yaの場所，持ち主である上野とのつながりの真ん中に神田がおり，そこからさまざまなつながりが派生していく，というスノーフレーク型のつながりを持っている。目の前の親子とのかかわりや交流を通して，いろいろなつながりができていく。

丸田の職場関係でかかわりがあった，こども相

談室（支援団体名）が活動場所で困っていたことも知っており，そこともつなぐ役割をしている。Co-yaの話が具体的になってきたところに，かかわりとしてこども相談室の名前も出てきた。こども相談室の本山とは，こども関係であることや活動場所に関することでもつながってきていた。当時，こども食堂は，丸田が所属する金融系企業の古いビルの1室を借りて開催していた。そして，こども相談室もその同じビルの，こども食堂の下の階を借りて行っていた。

「こども相談室が動いてきたんですよね。本人たちもやっぱり拠点が欲しいってことで」

「使っていい場所があるみたいよっていうのは小杉さんはそっち側で聞いてきたんですよね。私は私で上野さんから聞いてたので」

「こども相談室の方で小杉さんがもう仕事やめて，こども相談室に入ってたので，そのときにこういうその拠点がないから，いつもふわふわしてたんです。やっぱり下の階の人たち，前の私がこども食堂やってた教会のときも，こども相談室と一緒に行って駄目だったら，一緒にここに動いていって，ここを使わせてもらえないかっていうようにもお話させてもらって」

神田は，地域包括支援センターの木村ともつながっており，ここから地域の高齢者の歯の健康を守る歯科医，中山にも声がかかっていく。

「Z地域包括を呼んで，Z地域包括から中山先生も呼ぼうってなって。こういうことでこども食堂をしたいので，こども食堂でペンキを塗りをしたいから，誰が手伝ってくれませんかっていうふうに公募をかけたときにZ地域（包括）に声をかけてくれて，初めて中山先生連れてきてくれたんです。で，はじめてそこで知り合ったんです」

「（Co-yaについては）何か壊すっていうか，多分そのままになってたから，何か使っていいよっていう話が出てるというふうに聞いて，私もそんなふうに聞いたから」

「そしたら，みんなでリノベして，あの使いやすくしようって言って。元からのメンバーは私，その下でやったときいてたので，知ってたので。できるんじゃないかと思ったので，皆さんにお声掛けした。Tさんでやったっていうのは，ほら，いろんな人とペンキ塗りしたじゃないですか。そのときのメンバーに中山先生入ってたんです。それで最初，そこで中山先生とつながった」

「何だか，そのメンバーを連れてくれば絶対うまくすると思ったので呼んだんです」

神田のつながり，ネットワークは広い。そして，ネットワークの広さだけではなく，そこを「つなげる」ことを神田は積極的に行っている。それは「なんとなくつながっている」だけでは動かず，「やりたい」「来たい」などの意思をもっていないと始まらない，みんなの居場所だと感じるようにならない，ということをこども食堂の経験で培ってきている。

「結構Co-yaでいきなりワーッて「これやりたい！」で，これが何となく繋がってたのが，いきなりワーッて集結した感じ。何か根本から繋がってた人が，そこで一旦ね」

「こども食堂って，「こどものため」って思ってみんなが集まりやすい。いろんなプレーヤーがいたので，いろんなプレーヤーがいたからいろんなことができたらいいなと思ったんでね」

みんなの「これ，やりたい」を共通語に，たくさんの「やりたい」が集まる場所へ，そしてこども食堂の意味がどんどん広くなる期待感がCo-yaにあった。

6．4．ホウの語り「自分がいていい場所，戻れる「実家」をともにつくる」

ホウは私のゼミの学生であった。ホウは，コロナ禍の中2021年，日本の4年制大学の3年次に編入した。「留学」1年目は日本入国も叶わず，すべての授業がオンラインでビデオ会議システムを用いたものだった。ホウの留学した大学「キャンパス」はオンラインで，他の学生と対面で会うことはできなかった。ゼミも同様である。入学した大学ではゼミだけは対面で行っていたため，日本にいる他のゼミ生は対面で集い，ホウはその対面の場にオンラインで，「画面」の人，として参加していた。その後，徐々に対面の授業が増えていき，キャンパスに学生が戻ってきたが，ホウは入国できなかった。1年後，最終学年である4年生でホウはようやく日本入国ができた。初めてゼミに対面で参加した時の気持ちをホウが語っている。

> 「（日本に）来るときにはもう，4年生だから，皆さん正直に言うと，もう皆さんがもう1年生2年生のときには，もう自分のグループが作ってって，ほとんどできないですね。友達を作るみたいな感じなのは」

来日後，ホウは今までできなかった「人とかかわる」ことを切望していた。それを「友達を作る」という言葉に変えてホウは気持ちを語っている。

> 「なんか元々日本に来て，誰か人とかかわりたいなっていう気持ちがあった。最初はありますね。一応最初はあって何か自分友達を作りたいという気持ちなんだけど」

しかし，4月から日本で新たな大学生活を送るうちに，この「人とかかわる」ということや，「友達をつくる」ということも，実際の生活の中では特に何も起こること，自分から何かを起こすこともなく，日々が過ぎていった。その中でホウの気持ちも変わっていったという。

> 「4月からずっと夏休みのときもなんか，ほとんど誰でもつながっていないで，もういいか。本当は（自分の国）に戻りたいっていう感じもまだないんですけど，でもほとんど何かモチベーション，何かやりたいとかってことが，気持ちが，パッションがなくなったみたいな感じです。ほとんど何もできない，何も何でもいいという感じで」
>
> 「なんかどこにも自分がいていい場所みたいなのが見つからない感じだった」

私はゼミの学生全員に，私に届いたまちで行われるイベントや，活動，学生サークルの案内などをSNSやメールで転送している。そのうちの一つに，こども食堂やCo-yaのお掃除会もあった。ホウはまず，こども食堂に興味を持ち，どのように参加したらいいのか，私に聞いてきた。私はこども食堂のSNSを紹介し，自分でダイレクトメールを送ってみるよう伝えた。このこども食堂は，神田が主催しているものであるが，その当時，私はまだ神田と面識はなかった。ホウはこのこども食堂での活動を始め，その中でこども食堂もかかわるCo-yaのイベントにも参加した。

ホウにとってのCo-yaの最初のイベントは，2022年11月のペンキ塗り会である。ペンキ塗り会には，本稿の人物全員がかかわっている。ホウもこども食

堂経由でこのイベントに参加していた。

「なんかみんなと一緒にワイワイみたいな感じだけど，めっちゃ嬉しいなと思って。なんかつながれた，楽しいなって，はい，思ったのは，そういう機会があったから」

この「ペンキ塗り会」で知り合った中山との出会いがホウにとっては大切なものであったという。

「最初は中山先生ですね。もう中山先生が一番印象が，うん，印象が残ってる感じね。一番張り切ってたんですね。終わった後でまた僕ともう2人と一緒に何か食事しましたんだけど誘えて，そういうときもなんかとても嬉しいなって感じですね」

ホウはここから急速にCo-yaや，こども食堂の活動に参加していく。

「みんなね，Co-yaと出会ったときですね。11月が先生（私）からの紹介で，ずっと自分の実家の感じで，生活の実感が感じてて。こっちに遊びたい，こっちに行きたいという感じもあって。だから，そうですね，一番いいと思いますね。」

「何かボランティア活動だけど，ボランティアになりたいとかという感じではないけど，うん，はい，単純に誰かとつながりたいかそうですね，遊びたいという感じだった」

「今暇だから，「誰かさんが困ってる」みたいな，手伝いが必要だったらもう自分別に他に行くことがないから，こっちに行こうかな，そうですね。うん。本気にお金がもらえるかどうかも別にどうでもいいという感じで，うん。そういう感じですね。

ホウは，「支援活動に参加する」という気持ちから参加していたのではない，という。Co-yaに行けば，もしくはCo-yaの誰かがいる場所に行けば，誰かがいるし，遊べる。安心して「実家」のように過ごせる，と言っている。「つながる」「遊ぶ」ということばを使っているが，実際に行っていたことは，Co-yaの庭の整備や草むしり，こども食堂でこどもと過ごす，などである。Co-yaで支援活動している意識でもなく，いわばCo-yaを楽しんで作っている感覚である。

こうしたCo-yaの居心地については以下のように語っている。

「そういうなんか日本人じゃないから，何か遠回りみたいな感じで距離を取ってみる感じもあるし。だから，そういう人がいないっていう感じが受け入れて一緒に遊んで」

「自分分かんない日本語をするときにもちゃんと親切で説明するみたいな感じだから，そういうときには珍しいなと思っていいところだなっていうね」

「ホウは外国人である，だから…」というところから入らず，いっしょにCo-yaの活動をしたり，Co-yaにいることをともに楽しむ。外国人だから日本語が分からないだろうと意識するのではなく，日本語を教えるというというのでもなく，単に分からなかったら説明する，それが心地よさにつながっている。

現在，ホウは大学を卒業し，A市を離れている。しかし，たまにCo-yaのオンライン会や，イベントにも参加をしに帰ってくる。

「A市から離れて今，違うところにいるんだけど，でもこうやって帰ってこれるっていうのは，なんかちょっとA市に愛着を感じる愛着っていうのは，A市が，いいな，みたい

な，なんかホームタウン的な。機会があったら，こっちに帰ってきたいなって思う場所にはなった。そうですね，できれば，戻りたいですね」

6. 5. 丸田の語り「Co-yaの経済的価値　オープンイノベーション」

丸田は地域に根ざす金融系企業の社員としてA市にかかわってきた。その企業は，地域の人々の暮らしに寄り添い，地域とのつながりを大切にするという企業理念を持つ。その中で丸田は地域の人々が集まる場所，イベントにいつもニコニコしながら参加している，そんな印象であった。

丸田は企業人であり，活動参加時に交換する名刺も企業のものである。しかし，Co-yaの活動に企業組織の人間としてこの活動にかかわっているのか，一市民としてかかわっているのかは明確に線引きはしていない。

「（企業名）の中期計画とかにも入ってる方向なんで，そういう場所になるっていうことであれば，どんどんどこでも協力していくというスタンスで，いや，でも入ったときはどちらかというと個人的に興味があるというか，やってることとすごく重なりがあるから，うん，入った感じなんですね。個人的にというか組織的にもですね」

企業として興味を持っていること，産業界でも起こっていることが市民間でも起きているということに非常に興味を覚えたのだという。

「本当は産業界の人たちがいろんな異業種が来て，オープンイノベーションいずれにしてもそういうね，いろんな角度で意見交換する場っていうのを作っていこうっていうかですね」

「ネットワークがたくさんある地域とかそういうお互い意見交換をたくさんできる地域っていうのはやっぱりイノベーションがいろんな意味でその技術的なだけじゃなくて，これとこれと結びつけて面白い商売ができるんじゃないとか，そういう形で経済発展がするんじゃないかと，はい」

Co-yaには，丸田と同じ企業の社員をはじめ，地域包括センター職員，市役所職員，医療従事者，福祉法人，教育関係者，と異業種の人々がかかわっている。そして意見交換をしながら，対話を重ねながらよりよいまちづくりを考えている。そのネットワークが，この地域の経済活性化につながる可能性を見出している。

さらに丸田はこの土地の不動産価値にも目をつけていた。Co-yaのある場所は，主要駅から細い坂道を歩いて5分ほどのところにある。Co-yaの家は，海を見渡せる斜面地に建っている。その利便性から多くの住民が住んできた。しかし，斜面地は高齢者には住みづらい。斜面地の住宅は徐々に空き家が増加した。A市も斜面地空き家問題・対策に頭を悩ませている。丸田は，その問題解決としてこの斜面地をポジティブに捉え，地域活性化のチャンスと考えていた。

「ロケーション，〇〇（ショッピングモール名）とかめちゃめちゃ近いっていう。それから景色がとてもいいし，ロケーションという意味では小学校がすぐ坂の上にあるので，子育て世代にはすごく適してる。だから，乳母車ベビーカーを使わなくなってから，足腰が弱り始めるまでの間の世代には絶対いいじゃない？」

「なんかこの世代交代しながら，住み手を循環していくっていうことができそうな場所ですよ。住み替えを前提にする。そしてそういう一番価値があるっていうことでA市の価値がはい上がっていくんじゃないかっていうね，そういう発想があるんで」

丸田の所属する企業は，Co-yaの場所の隣に空き家を購入し，企業の地域拠点，学生の活動拠点としても解放している。それは，Co-yaも隣にあり，相乗効果も期待してのことだという。

「もう居抜きで，Co-yaの方はかなりリノベが必要だったんですけど，うちの方はそのまま使える部分が結構多かったので，結構もうCo-yaの隣だし一緒に活用できるといいよねということもあったんで」

「今度国際交流パーティーとかああいうイベントが月に2，3回あって，それはCo-yaとの連携だから，夏休みとかはね，居場所作りでまたCo-yaとつながってこどもたちが毎日遊んでるんでしょうね。縄跳びだったりとか，お庭もあるからあっちの奥の方の庭もこれから使っていくか。そうすると結構，関係づくりだってできるじゃないかと」

6．6．私の記述

私は2020年からA市にある大学の日本語教師養成課程および留学生向け科目担当教員として勤務しはじめ，家族と離れ一人で暮らす居住地もA市に持った。ちょうど新型コロナウィルス感染拡大予防のため，日本国内も移動制限，「ステイホーム」が推奨されていた時期でもあり，私は着任直後からA市の外に出ることができなくなった。知り合いもいないA市で，大学の研究室と自宅との往復の中，「孤独」「居場所のなさ」というのはこういうことなのか，と言葉の意味をまさに経験し体感していた。

そのような中，オンラインで始めた「多文化共生」や「人生」「ことば」を問い，聞き，経験し発信するゼミ活動を通して，A市やA市隣接地域でまちづくりの活動をしている人々とのつながりを得てきた。コロナ渦が落ち着いた後，このつながりから多くの「まちをよりよくしたい」という想いを持って仕事，企業経営，任意団体運営をしている人々にも会ってきた。

そして，2021年からはA市のあるB県の地域日本語教育に関わることにもなった。B県も歴史的な背景から「国際的」なイメージを持つ県である。しかし，地域日本語教育に関してはあまり進んでいるとは言えず，一からB県ならではの地域日本語教育をつくろうと県職員，国際交流協会，地域日本語コーディネーターが奮闘している。私はそこに日本語ボランティア養成講座講師や，B県地域日本語教育推進事業総合調整会議の委員として，B県のめざす，「全ての県民が互いの文化を理解し，尊重し合える多文化共生社会の実現に向け，地域の多文化共生の推進拠点となる，地域主体の日本語教室の設置推進を図る」ことにかかわりながら，この目的について考え，実践に寄り添ってきた。

B県ではこれらの取組を通して，人，地域へのアプローチを課題としていた。特に，「日本語ボランティア」「地域日本語教育」とすると，このテーマに興味を持っている限定された人にしかアプローチできないという悩みがあった。また，「日本語ボランティア」や「地域日本語教育」という語に「「日本語を外国人に教える人」という静的で固定的なイメージを持たれがちであることも，他地域のコーディネーターとの話の中で共有する悩みであった。まちの人の「自分ごと」にできず，実践の輪を広げることができない，ということも課題であった。

この実感は私も様々な実践を通して持っていた。

しかしそこをどのようにしていけばよいのか，私も悩んでいた。国際交流協会の職員や，地域日本語教育コーディネーターとともに，「日本語ボランティア」ではなく，異なる名称を考える，「地域日本語教育」という語を使わない，などの話し合いを持ちながらもよい方向性を見出せずにいた。

そのような中で出会ったのが，ゼミ活動でも協力関係にあったS企業の広報担当の小杉だった。小杉から「突然ですが」と誘いがあった。それが2022年9月に開催するCo-yaのお掃除会だった。Co-yaにはまだ名前もついておらず，「空き家」と呼んでいた。この空き家を不登校の子どもや，高齢者，外国人もまちの人が誰でも気軽に立ち寄れる場所にしたい，それをつくるプロジェクトを立ちあげた，という。そしてここにはA市市役所職員も参加する予定，と言われた。

この誘いから少し時間をおいて再度連絡があった。色々と声をかけていたらかなりしっかりとしたプロジェクトになってしまった，お掃除会終わったあとで，この空き家の活用方法や，みんなのやりたいことを話し合う時間を持つので参加してほしい，ということだった。

私はワクワクした。なにかが起こりそうな気がした。これまでこうした様々な人が参加するプロジェクトに声をかけてもらったことがなかったし，どちらかというと「日本語教育」や「地域日本語教育」の実践をする私から自分のプロジェクトへの参加の誘いをすることが多かったためである。「日本語教育」の範囲で自分が思いつくところで，誘いにのってくれそうなところと「連携」をお願いしていた。しかしこの空き家プロジェクトは，私が考えていること，「私はそのまちにかかわる市民が交わる中で，創造的に動的にことばを使いながら，自分たちのことばもまちもつくっていく」（前掲）が生まれそうな気がしたのである。それに，それは私の「居場所」にもつながりそうだった。

7. 記録への展望

本稿は，ひとつの出来事，「Co-yaはどのように生まれたのか」について語る6名の個人の経験を並列で提示し，この6名の語りの重ね合わせによって出来事の多面性を記録するものであった。私の経験，私の視点で見たCo-yaのストーリーからだけで考える「次の実践」もある。6名がそれぞれの語りをお互いに見て考える「次の実践」もあるだろう。または，異なる他地域のストーリーから生み出す「次の実践」もあるかもしれない。それが，本稿の目的である，次の実践研究を考えるリソースとなり，次の「どのように生まれるのか」を考える実践研究につながることを期待したい。

文献

佐藤郁哉（2002）.『フィールドワークの技法――問いを育てる，仮説をきたえる』新曜社.

佐野香織（2021）. 市民として社会にかかわる契機としての「まちのことばをつくる」プロジェクトの可能性『長崎国際大学論叢』21，71-78. https://niu.repo.nii.ac.jp/records/1599

荘島幸子（2008）トランスジェンダーを生きる当事者と家族――人生イベントの羅生門的語り『質的心理学研究』7，204-224. https://doi.org/10.24525/jaqp.7.1_204

広石拓司（2020）.『専門家主導から住民主体へ――場づくりの実践から学ぶ』エンパブリック.

細川英雄（2013）「私はどのような教育実践をめざすのか」という問い――ことば・市民・アイデンティティ. 細川英雄，鄭京姫（編）『私はどのような教育実践をめざすのか――言語教育とアイデンティティ』（pp. 9-16）明石書店.

三代純平，古賀和恵，武一美，寅丸真澄，長嶺倫子，古屋憲章（2014）. 社会に埋め込まれた「私

たち」の実践研究――その記述の意味と方法. 細川英雄，三代純平（編）『実践研究は何をめざすか――日本語教育における実践研究の意味と可能性』（pp. 91-120）ココ出版.

山崎亮（2012）.『まちの幸福論――コミュニティデザインから考える』NHK 出版.

吉田禎吾（1969）. 自伝の文化人類学的意義［解説］. ルイス，O.『サンチェスの子供たち Vol. 2』（柴田稔彦，行方昭夫，訳）みすず書房.（原典 1961）

http://alce.jp/journal/ vol. 22 (2024) pp. 306 - 321 ISSN : 2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

Forum

Documenting the moment of emergence:

Narratives from people in academia, industry, and the community using the Rashomon-style method

SANO, Kaori*

Nagasaki International University, Japan

Abstract

This study examines the moment characterized as "happened and emerged" by a diverse group of individuals from academia, industry, and the local community residing in the town. We will discuss the pivotal period of early-stage practice that culminated in the birth of the Co-ya (pseudonym, organization name, and location) in a local city in Japan. This study aims to present this practice as a shared story and serve as a resource for future "practice-based research." It seeks to illustrate how the Co-ya emerged through the interactions and efforts of various individuals striving for a better city. To achieve this, a Rashomon-style method was used to capture the multiple perspectives of six individuals regarding the emergence of the Co-ya concept.

Keywords: "practice-based research," sharing practices, stories, Rashomon-style method, documentation

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

* *E-mail:* sano.kaori@niu.ac.jp

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP23K00644.